



第2部 Part II

教育・研究の歩み

History of education and research

保健福祉学部



沿革

1993 (平成5) 年	岡山県立大学開学 保健福祉学部を設置 (看護学科、栄養学科、保健福祉学科) (各学科定員 40 名)
2007 (平成19) 年	短期大学部閉鎖に伴い、保健福祉学科に子育て支援コースと介護福祉コースを設置 (定員 60 名)
2013 (平成25) 年	保健福祉学科再編、社会福祉学専攻 (定員 40 名) と子ども学専攻 (定員 20 名) を設置
2021 (令和3) 年	保健福祉学科を廃止、現代福祉学科 (定員 35 名) と子ども学科 (定員 25 名) を設置

教育理念

保健福祉学部では、地域や国際社会における人々の健康維持と増進に積極的に貢献できる看護、栄養、福祉、教育に関する幅広い知識と技術を修得し、専門分野に関する課題を科学的、論理的思考や分析に基づいて主体的に解決する能力を備え、高い倫理観と豊かな人間性にあふれ、さらに多様な人々と協働して社会の変化やグローバル化に柔軟に対応できる力とコミュニケーション能力を有する人材の育成を目指している。

教育方針

保健福祉学部では、学位授与の方針に掲げる人材を育成するため、4年間で系統的に修得した看護、栄養、福祉、教育に関する広範囲な分野の専門的知識を基礎として、専門分野に関する課題を科学的、論理的思考や分析に基づいて主体的に解決できる能力や多様な人々と協働して地域やグローバル社会に柔軟に対応できる力とコミュニケーション能力を発揮し、自身の専門的活動に活かすことができるよう、体系的な教育を行う。



歴代学部長

1代	1993(平成5)年度	～	金政 泰弘
2代	1997(平成9)年度	～	田川 邦夫
3代	2000(平成12)年度	～	沖田美佐子
4代	2003(平成15)年度	～	高井 研一
5代	2007(平成19)年度	～	中嶋 和夫
6代	2009(平成21)年度	～	香川幸次郎
7代	2011(平成23)年度	～	辻 英明
8代	2013(平成25)年度	～	高橋 吉孝
9代	2017(平成29)年度	～	伊東 秀之
10代	2021(令和3)年度	～	近藤 理恵

学部長から

保健福祉学部を卒業した学生は、3,638人にのぼります。卒業生達が、看護学、栄養学、社会福祉学、幼児教育学の専門知識を活かしながら、社会で活躍していると考えれば感慨深いです。保健福祉学部では、困難を抱えた人々に寄り添いながら、人々の健康と福祉に関する教育と研究を行ってきました。グローバル化、少子高齢化、環境の変化等によって生じている新たな社会的課題解決に向けて、一層の教育と研究を展開します。

教育・研究のあゆみ

1993年に、岡山県内の保健や福祉を担う人材を育成するために、看護学科、栄養学科、保健福祉学科の3つの学科からなる保健福祉学部が創設された。創設以降、30年の間に、看護学、栄養学、社会福祉学、幼児教育学を専門とする3,638名(令和4年度末時点)の卒業生を輩出してきた。多くの卒業生が、国や地方自治体、病院、学校、福祉施設、企業、民間団体等で、専門職として活躍している。

2021年4月には、不確実な時代の多様な福祉ニーズに対応するとともに、近年重視されている就学前教育のニーズに対応するために、保健福祉学科を廃止し、新たに現代福祉学科と子ども学科を創設した。現代福祉学科では、精神保健福祉士国家試験受験資格とスクー

ルソーシャルワーク認定資格が取得できるような新カリキュラムを設定した。

また、近年、保健福祉学部では、少子高齢化、グローバル化、さらには大規模災害や経済的格差等の新しいリスクに対応すべく、従来から行っている保健と福祉に関する教育・研究に加え、災害看護、国際看護、食品科学、新しいリスクに対応する福祉、自然を通じた幼児教育に関する教育・研究を活発に行っている。

グローバル社会に対応できる能力を育成するために、海外交流校との国際学術交流も積極的に推進してきた。韓国、香港、オーストラリアにおいて専門分野の海外研修を実施するとともに、海外協定校の学生に対し、本学にて専門分野の研修を提供してきた。また、海外

の研究者による学術講演会を開催してきたが、2022年度には、オンラインによって、本学部教員と韓国の又松(ウソン)大学の教員とが、看護、栄養、福祉、幼児教育に関してそれぞれ同じテーマで発表し、両大学の学生が質疑応答をする企画を実施した。

また、岡山県内の公的機関や民間団体等と連携し、看護、栄養、福祉、幼児教育の分野に関する地域の課題解決に積極的に取り組んできた。

学部長
近藤 理恵



看護学科

学部・学科

Faculty・Department



I 教育・研究の特色

看護学科では、健康で豊かなその人らしい人生の実現を支援するための専門的知識・技術と倫理観並びに豊かなコミュニケーション能力を育み、地域におけるあらゆる健康レベルの人々の生涯を通じた健康を支援し、岡山県から広く地域社会及び国際社会に貢献できる人材の育成を目指している。

II 活動の記録

1. 臨地実習教育

2022年のカリキュラム改正により、1年次に地域生活支援基盤実習、4年次に地域連携実践実習を導入した。1年次に地域生活支援基盤実習、1年次と2年次に基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱ、3年次と4年次に成人看護学実習Ⅰ・Ⅱ、老年看護学実習、小児看護学実習、母性看護学実習、精神看護学実習、在宅看護学実習、統合実習、地域連携実践実習、助産学実習を実施している。

2. 西日本豪雨災害時の被災者支援

2018年7月の西日本豪雨災害時には、総社市の被災地及び真備町で、教員と学生が支援活動に参加した。総社市では、災害直後の支援から仮設住宅への転居後のフォローアップまで被災者への支援を行った。災害直後の支援として、総社市役所の医療推進課と協力して、ボランティアの熱中症対策の支援を4日間行った。その後、毎週木曜日18時から保健師とともに避難所を定期的に訪問し、健康チェックを行った。仮設住宅への転居後は、総社市主催の「ホットカフェ」に参加し、味噌玉づくり、笑いヨガ等の健康チェックを兼ねた支援を行った。真備町では、倉敷市保健師とともに、真備町の避難所の健康チェック、個別訪問を行った。AMDAとの連携により、真備町の避難所で2週間にわたり足浴のケアを提供した。

3. グローバル教育

看護学科では、ネパールのトリブバン大学、韓国の又松(ウソン)大学校、香港理工大学と学術交流を重ね、このうち香港理工大学とは、コロナ禍においてもWEBによる交流を行ってきた。

4. 看護研究支援

病院の看護師の方の全国学会での発表の支援や、病院における看護ケアの検証等の支援を行っている。現在看護研究を支援している施設は、倉敷中央病院、岡山赤十字病院、水島協同病院、岡山医療センター、岡山市立市民病院、赤磐医師会病院の6施設である。看護学科の教員は、看護職を対象とした研究会を開催している。コロナ禍でもWEBを使って研修を継続している。



栄養学科

学部・学科

Faculty・Department



I 教育・研究の特色

栄養学科では、人間、健康、社会に関する幅広い知識と論理的な思考力をもとに、人々の健康維持・増進、病気の予防・治療を図り、広く地域社会や国際社会に貢献できる人材の育成を目指している。食と健康の相互関係を科学する「生命科学としての栄養学」に主眼を置き、「食物を摂取する人」を中心に据えたカリキュラムを編成していて、食品学・栄養学・生命科学の3つを柱に関連科目を系統的に学ぶことができる。また、主に栄養学と食品学に関連する領域で、基礎から応用にわたる多面的な研究を展開しており、人々の健康の維持増進に貢献することを目指している。さらに、共同研究や地域連携事業を通して、地域社会が抱える問題の解決や地域振興の推進にも積極的に取り組んでいる。

II 活動の記録

1. 臨地実習教育

栄養学科では、社会で即戦力として活躍するための実践力を滋養するために、学内外の実習や実験の機会を豊富に用意している。必修科目として、1年次に栄養学基礎実験、調理学実習Ⅰ、2年次に解剖生理学実験Ⅰ、微生物学実験、生化学実験Ⅰ、食品学実験Ⅰ・Ⅱ、調理学実習Ⅱ、栄養学実験、3年次に解剖生理学実験Ⅱ、生化学実験Ⅱ、食品衛生学実験、栄養学実習、栄養教育実習、臨床栄養学実験、臨床栄養学実習Ⅰ、公衆栄養学実習Ⅰ、給食経営管理実習Ⅰ、4年次に卒業研究を実施している。また、臨地実習（学外実習）として、3年次に臨床栄養学実習Ⅱ、給食運営実習、公衆栄養学実習Ⅱ、給食経営管理実習Ⅱを実施している。

2. グローバル教育

海外協定校の学生や研究者との学術交流を通じて、グローバル社会で活躍できる人材の育成を進めている。アデレード大学（オーストラリア連邦）、カセサート大学（タイ王国）やダンヌンツイオ大学（イタリア共和国）とは、海外研修プログラムや講演会などを実施している。また、南昌大学（中華人民共和国）・四川大学（中華人民共和国）・又松大学校（大韓民国）と共に、輪番制で「東アジア栄養会議」を開催している。

3. 共同開発商品

栄養学科では、蓄積された研究成果や専門知識・技術等の知的資源を活用して、地域の食品企業等との産学連携を進めている。学生のアイデアを活かした「栄養バランス弁当」を株式会社ハローズと共同開発し、毎年内容のリニューアルを行っている。他にも、県内企業と協力して、クッキー、フィナンシェ、メロンパン、クラフトビール、日本酒などを開発している。





4. 学生団体活動

栄養学科の学生を中心に約50名が所属する学生団体「TAMAGO」は、副専攻の「おこやまボランティア演習」に参加した4名の栄養学科の学生が、大学での学びを地域で実践することを目的として2015年に発足させた。野菜不足の学生のためにワンコイン丼を提供する学生食堂としてスタートし、2019年からは地域の高齢者にヘルシーランチを提供する「まごわやさしい食堂」にシフトしている。他にも、高齢者に好みのお弁当を宅配するとともにメニュー紹介や健康アドバイスを行う「カスタマイズ栄養弁当プロジェクト」、総社発祥の和ハッカの新規用途を開発する「はっかプロジェクト」など、地域社会と密着した活動が高い評価を受けている。



I 教育・研究の特色

現代福祉学科では、現代社会において生じている複雑多様な社会的、個人的ニーズを科学的に解明し、すべての人々の健康と幸福の増進のために、介護福祉学を含む社会福祉学関連の学問を基盤に、グローバルセンスをもって岡山県から広く地域社会及び国際社会に能動的、創造的に貢献できる人材の育成を目指している。社会の多様なニーズに対応する行政職員やソーシャルワーカーを輩出するために、社会福祉学をベースに、福祉政策とソーシャルワークのカリキュラムを充実させた「社会福祉学コース」と、介護の知識と経営学の知識を有した、介護系の企業に就職する人材や介護福祉施設を運営する人材を輩出するために、介護福祉学と経営学をベースに、介護福祉学と経営学からなるカリキュラムを充実させた「介護福祉マネジメント学コース」を設定し、専門教育を受ける体制を構築している。



II 活動の記録

1. 実習教育

3年次にソーシャルワーク実習、4年次に精神保健ソーシャルワーク実習とスクールソーシャルワーク実習、2～4年次に介護福祉実習を実施している。

2. 低所得家庭の中高校生への支援プログラム

教員、学生、総社市、総社市社会福祉協議会が連携しながら、低所得家庭の中高校生を対象に学習支援や、博物館、科学館、美術館へのワンデイトリップを実施している。

3. 災害時要配慮者の避難行動促進プロジェクト

災害時要配慮者の避難行動に関してヒアリング調査を行い、次世代に活かす取組を、教員、学生、大学院生、自主防災組織、総社市、総社市社会福祉協議会とともに進めている。

4. 若年性認知症の方とのディスカッション

おれんじドア代表の丹野智文さん（認知症本人希望大使）を毎年お招きし、認知症とともに豊かに暮らすことについて、学部生と大学院生とともにディスカッションをしている。

5. グローバル教育

海外での授業の他、海外協定校の韓国の又松（ウソン）大学校やスウェーデン農業科学大学等の海外の研究者による講演会の開催を通じて、グローバルなセンスをもって活躍できる人材を育成している。また、又松大学校の学生たちに日本の福祉に関する短期教育プログラムを提供している。

子ども学科

学部・学科

Faculty・Department



I 教育・研究の特色

子ども学科では、子どもの育ちと支援にかかわる理論を理解し、子どもの学びと育ちを支えることができる実践力と生涯学び探究し続ける姿勢を身につけるとともに、子ども学を子どもの育成環境整備や保健・医療・福祉・教育分野との連携・協働へと応用し、岡山県から広く地域社会及び国際社会に貢献できる人材の育成を目指している。

II 活動の記録

1. 実習教育

2年次に福祉施設での「保育実習ⅠA」、3年次に岡山市、倉敷市、総社市を中心に幼稚園での「教育実習」及び保育所での「保育実習ⅠB」、4年次には発展的保育実習として「保育実習Ⅱ」（保育所）、「保育実習Ⅲ」（福祉施設）で教育・保育・福祉現場と連携しながら学生に臨床的知を身に付けてもらっている。

2. 「県大そうじゃ子育てカレッジ」

岡山県が推進する官民学協働による子育て支援事業を、2010年から子ども学専攻・子ども学科が中軸となり実施している。「学生も参加する親子交流事業」、「地域の子育て支援サービス提供者に対する質的向上の取り組み」など、多岐にわたる事業に継続的に取り組んでいる。

◆ チュッピーひろば

週に1～2回、総社市の地域子育て支援拠点（出張型）を遊戯室で開催し、毎回、親子10組程度の利用がある。遊びや交流等を通し、子育て・子育て環境向上につなげている。

◆ 親子で楽しむ音楽会

岡山フィルハーモニック管弦楽団を招いての0歳児から参加できる親子コンサートを毎年開催している。学生のステージも設けることで保育者としての資質向上にもつなげている。

◆ 保育ステップアップ講座

卒業生を含む現任者へのリカレント教育の一環で保育に関する専門的知識と技能の活用について学び、保育者としての力量を高めることを目的として「保育ステップアップ講座」を開催している。

3. 「チュッピーひろば」との協働授業

◆ チュッピーひろば夏祭り

「子育て支援プロジェクト研究A」（子ども学科1年生対象）の授業の一環で、「チュッピーひろば夏祭り」に受講学生が参画している。シャボン玉や水鉄砲など、遊びの環境を準備し、当日は来場した親子を直接援助することで、実践的な学びを得ることができている。





◆ 親子で楽しむミニミニクリスマス会

「保育内容（人間関係）の指導法」（子ども学科1年生対象）の授業において、ひろばの親子がクリスマスの雰囲気を楽しむことができるような遊びの環境構成と、パネルシアターや合奏などの出し物を企画し実践している。

◆ おはなしの会

保育内容（言葉）の指導法において2年生が行っている。学生は、言葉の発達や子どもへのかかわり方を学んだ後、絵本や紙芝居などを通して子どもに学んでほしいこと、子どもへの提示の仕方などを考え、活動を計画している。

◆ こどものためのアートパフォーマンス

表現系授業のまとめとして行っている授業成果発表会を「こどものためのアートパフォーマンス」として毎年地域に公開している。4年生は絵本を題材とした劇発表、3年生はダンス発表、2年生は合奏の発表を行っている。

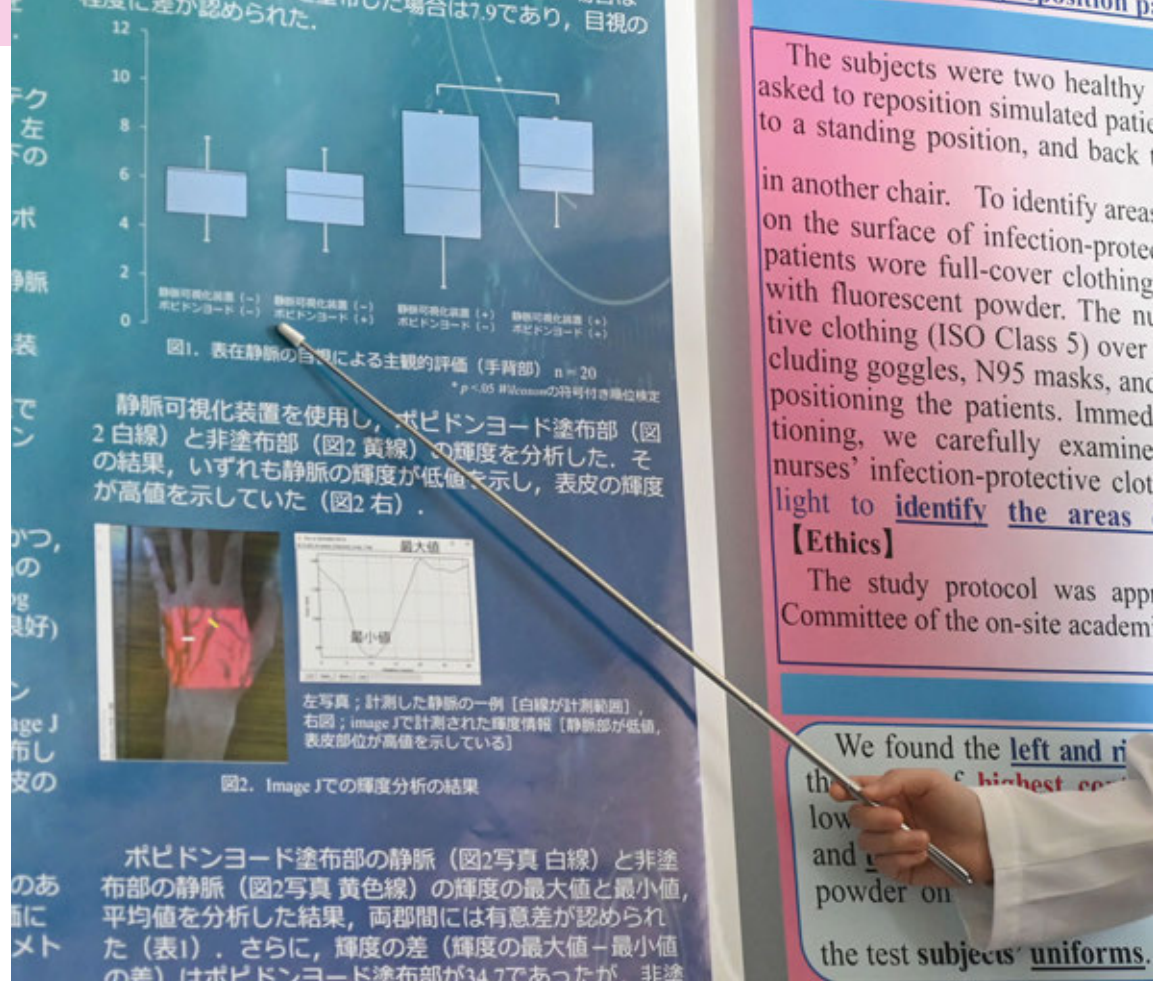
4. 「子ども臨床基礎演習」における近隣の園との交流

「現場を重視する立場」を1年次から学ぶために、総社市内の幼稚園や保育所に行き、子どもの姿や保育者の動き、保育環境について客観的に観察する力を養っている。

5. エディブル・エデュケーションの試み（菜園を通じた教育）

2021年度より自然資本を社会基盤に据える発想を学び、予測不可能時代に必要な文理の壁を越えた幼児教育人材を育成するためのプロジェクトが始動した。自然資本の重要性を幼児期の子どもたちに伝えられることを目指すとともに、自然環境の循環を学ぶことが人と社会の関係、人間関係理解、そして幼児理解に繋がることを体験的に学ぶためである。その具体的手法として、アメリカ発祥の体験的かつ横断的学習手法であるエディブル・エデュケーションを導入した。スクールヤードを学びの中心に置き、様々な教科へ展開する教育手法は、主に初等教育で実践されてきたが、大学教育に範囲を広げ、心理学、教育学、音楽、社会学等多領域に発展させる独自のプログラム開発を行っている。まだ試行的な取組であるが、受講した学生の授業への満足度は高く、自然への関心及び仲間との共感性の高まり、そして複合的視野の萌芽が見られるようになった。

保健福祉学研究科



沿革

1993 (平成5) 年	岡山県立大学開学
1997 (平成9) 年	保健福祉学研究科 (修士課程) 設置 (看護学専攻、栄養学専攻、保健福祉学専攻)
2003 (平成15) 年	保健福祉学研究科 (博士後期課程) 設置 (保健福祉科学専攻、看護学大講座、栄養学大講座、保健福祉学大講座)
2013 (平成25) 年	保健福祉学研究科 (博士前期課程) 看護学専攻再編 (保健師国家試験受験資格取得)

教育理念

保健福祉学研究科では、保健・医療・福祉分野の専門職としての深い知識と卓越した能力を身に付け、各分野の課題を提起し、それを解決し得る研究能力を持つとともに、広く健康社会の発展に貢献できる研究者あるいは高度専門職業人を育成する。

教育方針

博士前期課程では、高度な専門的知識・技能と情報収集能力、専門分野の諸問題を解決できる研究能力と情報発信能力、ヒューマンスキルを育成する体系的な教育を行っている。

博士後期課程では、高度の専門性と自立した研究遂行能力、グローバルな情報発信能力を育成する体系的な教育を行っている。

歴代研究科長

1代	1997(平成9)年度	～ 田川 邦夫
2代	1999(平成11)年度	～ 田内 雅規
3代	2001(平成13)年度	～ 高井 研一
4代	2003(平成15)年度	～ 辻 英明
5代	2005(平成17)年度	～ 香川幸次郎
6代	2007(平成19)年度	～ 中嶋 和夫
7代	2009(平成21)年度	～ 香川幸次郎
8代	2011(平成23)年度	～ 辻 英明
9代	2013(平成25)年度	～ 高橋 吉孝
10代	2017(平成29)年度	～ 伊東 秀之
11代	2021(令和3)年度	～ 近藤 理恵



教育・研究のあゆみ

1997年に、看護学専攻、栄養学専攻、保健福祉学専攻からなる保健福祉学研究科修士課程が創設され、2003年に看護学大講座、栄養学大講座、保健福祉学大講座からなる保健福祉学研究科博士後期課程保健福祉科学専攻が創設されて以降、保健福祉学研究科では、看護学、栄養学、福祉学の専門分野において、多くの専門職と研究者を輩出してきた。2022年度までに、88名が博士後期課程を修了し、476名が博士前期課程を修了した（看護学専攻の修了者数は171名、栄養学専攻の修了者数は149名、保健福祉学専攻の修了者数は156名であった）。

2023年現在の定員は、看護学専攻が7名、栄養学専攻が6名、保健福祉学専攻が7名であり、保健福祉学研究科博士後期課程保健福祉科学専攻は7名である。

博士前期課程の看護学専攻では、学際的で高い看護の専門的知識と基礎的な研究能力を活かして、保健医療福祉分野における課題を解決し、国内外の看護における実践・教育・研究の場で社会のニーズに応え、貢献できる人材の養成を目指した教育・研究に取り組んでいる。2013年4月に、保健師養成課程を学部から大学院博士前期課程に移行した。また、博士後期課程の看護学大講座では、基礎看護科学、患者及

びその家族が抱える諸問題や高齢者、地域のケアニーズに対応する看護システムやケア開発、看護の質向上に資する教育・研究等に取り組んでいる。

博士前期課程の栄養学専攻では、食品の機能や臨床栄養などの人の健康に関連した栄養学的な諸問題を解決できる優れた専門性を備えるとともに、豊かな創造力と問題解決能力を身に付け、社会のニーズに応えることができる人材の育成を目指して、教育・研究に取り組んでいる。2021年度までは、栄養情報学講座、食デザイン学講座、基礎栄養学講座、食品栄養学講座の4講座で構成されていたが、2022年度より、基礎栄養学講座、食品栄養学講座の2講座に改編された。また、博士後期課程の栄養学大講座では、食事に伴う栄養現象を生命科学的アプローチにより解明し、病気の一次予防から三次予防に至る各過程に活かすことを目指した教育・研究を行っている。研究では、食品中に含まれる新規機能性成分の探索並びに食品の安全性の追求、慢性疾患における脂質代謝をはじめとする代謝調節系の役割の解明、そして生命現象としての栄養の中枢神経系における制御系の解明などに取り組んでいる。

博士前期課程保健福祉学専攻では、保健・医療・福祉分野における問題点を提起してそれを解決し得る研究能力を持つとともに、専門職としての高度な知識・技術を身に付けることにより、健康で夢の持てる地域社会の実現に貢献し得る人材の養成に取り組んでいる。また、博士後期課程の保健福祉学大講座では、児童、障がい児・者、高齢者を主な対象とし

て、その自立支援に関する教育・研究を行っている。研究では、児童の健全育成と発達保障及び育児・発達支援の理論的探究と方法論の検討、身体、知的、精神障害の評価方法及び自立支援の理論的探究と方法論の探究、加齢に伴う身体的、認知的変容過程の探究及び高齢者の健康の保持増進を促す方法論の検討などに取り組んでいる。

また、これまで保健福祉学研究科では、中国、ネパール、韓国、スウェーデン等の海外の研究者との学術交流を積極的に行ってきた。



情報工学部



沿革

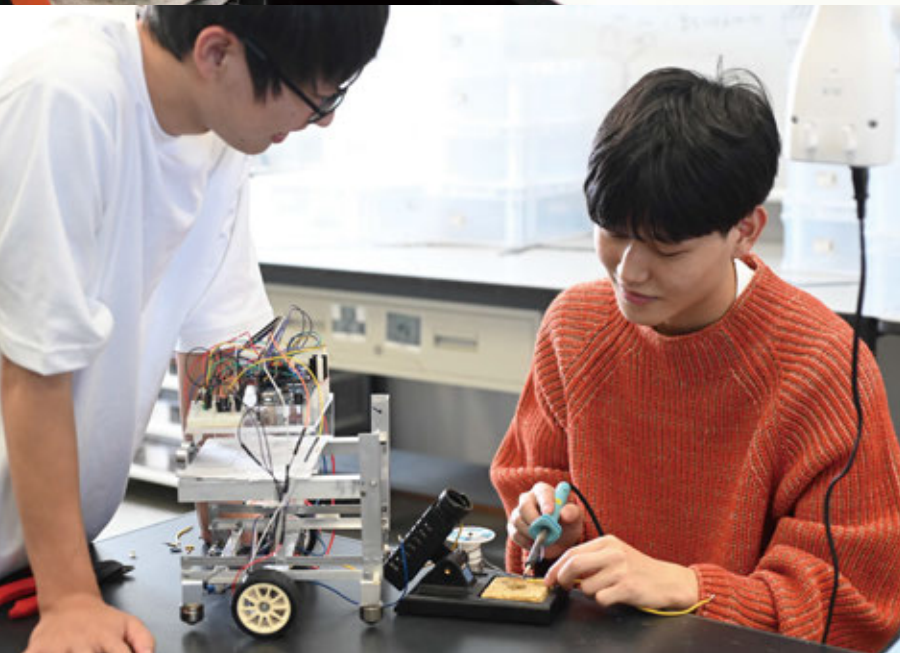
-
- | | |
|---------------|---------------------------------------|
| 1993 (平成5) 年 | 岡山県立大学開学 情報工学部を設置 (情報通信工学科、情報システム工学科) |
| 2006 (平成18) 年 | スポーツシステム工学科 設置 |
| 2015 (平成27) 年 | スポーツシステム工学科を人間情報工学科に名称変更 |
-

教育理念

情報工学とは、情報の伝送・認識・処理・利用にかかわるハードウェアとソフトウェアの技術を研究開発するための学問である。情報工学部は、情報通信工学科、情報システム工学科、人間情報工学科の3学科で構成され、情報工学の知識を基盤に、電子・通信工学、機械工学、人間工学等の関連工学分野の知識を複合的に修得し、豊かな教養と人間性に基づいてそれらを総合的に活用し、グローバルな視点と主体性・協調性をもって人間及び環境との調和を図りながら高度情報化社会の持続的発展に貢献できる技術者の育成を目指している。

教育方針

情報工学部では、学位授与の方針に掲げる人材を育成するため、4年間で系統的に修得した情報工学に関する広範囲な分野の専門的知識を基礎として、通信工学、電子工学、機械工学、インタフェース工学、生体機能学、機器設計学など、常に進展する先端的な技術を自主的・継続的に学習し、自身の活動に活かすことができるよう、体系的な教育を行っている。また、地域企業との協働のもと、より実践的なスキルを修得できるよう、共通教育科目と学部教育科目からなる副専攻を設置している。



歴代学部長

1代	1993(平成5)年度	～ 本田 和男
2代	1997(平成9)年度	～ 寺本 巖
3代	2001(平成13)年度	～ 亀山 嘉正
4代	2005(平成17)年度	～ 山北 次郎
5代	2007(平成19)年度	～ 加藤 隆
6代	2009(平成21)年度	～ 渡辺 富夫
7代	2011(平成23)年度	～ 横田 一正
8代	2013(平成25)年度	～ 金川 明弘
9代	2015(平成27)年度	～ 尾崎 公一
10代	2019(令和元)年度	～ 榊原 勝己
11代	2021(令和3)年度	～ 尾崎 公一

学部長から

1990年代からのコンピュータ技術の進展は目覚ましく、開学当時は業務への利用が主であった情報技術は、30年後の現在、携帯電話やインターネットが社会インフラの一つになるまでに成長しています。政府の第5期科学技術基本計画で提言されたSociety5.0では、サイバー(仮想)空間とフィジカル(現実)空間が融合され、IoTで全ての人とモノがつながり、人工知能、ロボット、自動走行車などが身近な存在になります。情報工学部は、これからも、時代の変化に柔軟に対応できる技術者を輩出すべく、教育・研究を展開します。

教育・研究のあゆみ

情報工学部は、1993年、情報通信工学科と情報システム工学科の2学科で開設された。1997年度の修士課程(現博士前期課程)設置にあわせて講座の再編成がなされ、情報通信工学科は情報工学・通信工学・電子工学を基盤とする人材育成を、情報システム工学科は情報工学・機械工学・インテリジェント化の工学を横断的に活用できる人材育成を担う体制が整えられた。「人間中心の設計思想」を教育・研究理念として2006年に設置されたスポーツシステム工学科は、教育・研究内容がより正しく伝わるように2015年に人間情報工学科に名称変更され、情報工学・人間工学・機器設計工学を基盤とする人材育成を担っている。現在、情報工学部は、「人、モノ、情報が織りなす未来へ」をキャッチフレーズに掲げ、

情報技術を活用して、人間及び自然との調和を図りながら高度情報化社会の持続的発展に貢献できる技術者の育成を行っている。3学科に共通する基盤技術としての情報工学に加え、各学科の関連工学分野の知識と、それらに応用できる能力を育成することで、将来を見据えた技術者人材を輩出しており、2022年度末までに3,422名の卒業生を世に送り出している。年度により変動はあるが、卒業生の約30～50%が大学院に進学している。また、主な就職先は、情報・通信業、電気・電子業、製造業、公務員等であり、幅広い分野で技術者として活躍している。情報工学部は、地域産業界との大社連携にも積極的に取り組んでおり、地元企業を中心とした岡山県立大学協会の設立(2018年3月)に主導的な役割を果

たした。同会からは、授業科目「エンジニアリング演習」及び「未来型プロジェクト<ICT>」にテーマを提供いただくほか、寄附講座として「技術者と社会」に講師を派遣いただいている。以上の教育に関する取組に加え、岡山県立大学協会会員企業による業種説明会を2018年度から、原則、12月に1回、2月または3月に1回の年2回開催している。グローバル社会に対応できる能力を養成するため、国際学術交流も積極的に推進しており、インドネシア・ハサヌディン大学、タイ・カセサート大学、韓国・又松大学校、マレーシア・マラッカ技術大学との交流を継続している。

学部長
尾崎 公一





I 教育・研究の特色

情報通信工学科は、日々進歩し続ける情報通信技術（ICT）を支えている情報工学、通信工学、電子工学の3つの学問領域を共通の基盤として、各種情報システムの知能化等に必要となるソフトウェア技術及びシステムの超高速化等に欠かせないハードウェア技術を有し、ICTの利用者視点を理解するとともに、豊かな教養と人間性に基づくグローバルな視点から主体性・協調性をもって社会に貢献できる情報通信技術者の育成を目指している。

II 活動の記録

多くの取組は、情報工学部の3学科合同で実施されている。そのため、学科独自の取組としては少なくなるが、中でも主なものを以下に挙げる。

1. 学外オリエンテーション

新入生に対して4月中旬に宿泊を伴う学外オリエンテーションを実施している。開学当初は任意参加としていたが、学生相互や教員との親睦を深める効果が大きいため、近年では導入科目の「フレッシュマンセミナー」に組み込み、現地での研修も行っている。

2. 計算機演習室の整備

開学から一貫してUNIX OSの計算機をリース更新してきた。開学当初はSolarisを搭載したSun Microsystemsのワークステーションを配備していたが、近年ではLinuxを搭載したPCを配備している。授業の合間には、学生の自習用に開放している。また、一般県民向け講座や高校生向け模擬授業などにも利用している。

3. インターンシップ

県内の企業や自治体での就業体験で、かつては学科ごとに実施していた。現在では、企業での実習は情報工学部で取り組んでいる「エンジニアリング演習」、自治体での実習は共通教育科目の「地域インターンシップ」で行われており、いずれも副専攻「岡山創生学課程」の科目となっている。

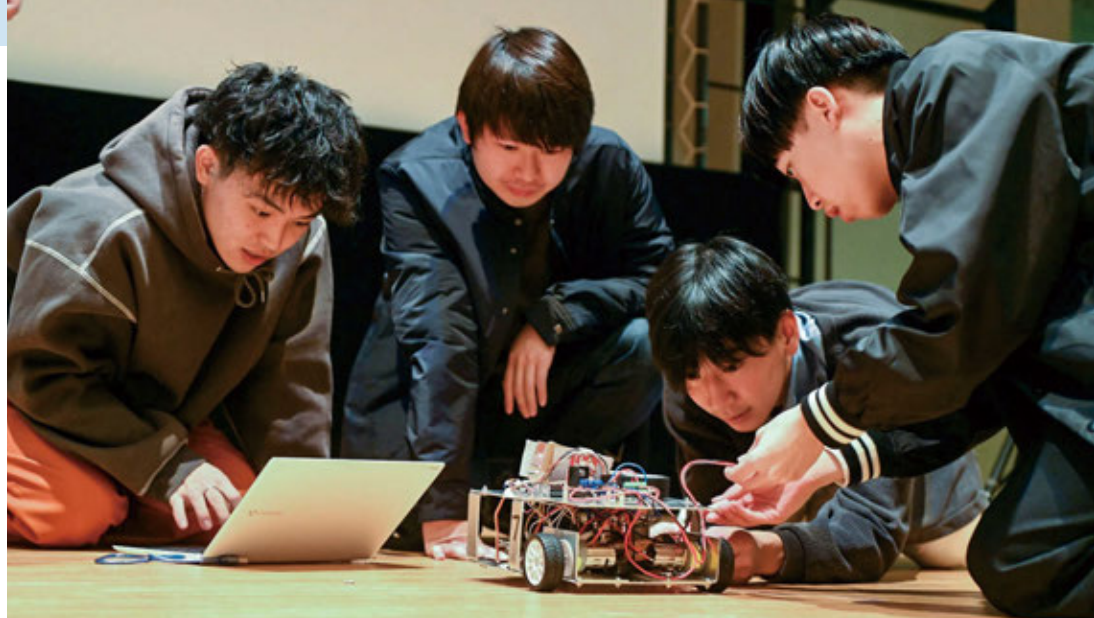
4. 親子で学ぶプログラミング教室

2017年度から小学4年生以上の児童と保護者を対象としたプログラミング教室を開いている。毎年20組くらいの参加がある。2021年度からは「おかやまキッズプログラミングアワード」に資料提供などの協力もしている。

5. 国際交流

韓国の又松中学校との間で、先方と本学の学士を同時に受けることができる協定を締結している。この制度により、これまで2名の3年次編入生を受け入れた。また、又松中学校から交換留学生を1名受け入れた。





I 教育・研究の特色

情報システム工学科は、コンピュータの発展に貢献できる情報工学、力学に基礎を置くものづくりのための機械工学、人間と機械やコンピュータを結びつけるインタフェース工学などの学問を修得し、領域横断型のエンジニアとしてのセンスをもって、グローバル社会において豊かな教養と人間性に基づき、新たな工学的価値の創出に積極的に参加できる技術者の育成を目指している。現在、下記に示す3講座9教育研究分野から構成されている。

情報システム工学科 学科構成 (2022年10月時点)

講座	教育研究分野		
ソフトウェアシステム工学	計算機数学基礎	知能情報処理	ソフトウェアデザイン
知的インタフェース	回路デザイン	ヒューマンインタフェース	制御・ロボット工学
機械・エネルギーシステム工学	応用材料学	エネルギー工学	人工物設計学

II 活動の記録

1. 学科教育

情報工学、機械工学、インタフェース工学に関する広範囲な分野の専門的知識を基礎として、常に進展する先端的な技術を自主的・継続的に学習し、自身の活動に活かすことができるよう、体系的な教育課程を編成している。

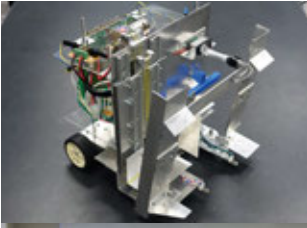
2. 学外オリエンテーション

1年生の必修科目「フレッシュマンセミナー」の一環として4月中旬に宿泊を伴う学外オリエンテーションを実施し、学生相互や教員との親睦を深める機会としている。

3. 計算機演習室

Windows OSの計算機システムを整備している。C言語、Pythonなどによるプログラミング、3次元CAD、FEMによる構造解析、FPGAを用いた回路設計及び実装、MATLABによる解析などの教育に利用している。また、地域の企業の技術者を対象としたリスクリングの一環として、人工知能や画像処理、組込み技術に関する講義・演習や公開講座などにも利用している。





4. システム創造プロジェクト

3年生の授業科目「システム創造プロジェクト」では、一連の授業科目で学習してきた「情報工学」、「機械工学」、「インタフェース工学」に関わる基礎知識を応用し、グループごとにマイコンを使用した自律型移動ロボットを設計・製作し、ロボットコンテストにおいてその能力を競っている。



5. 卒業研究

4年生の「卒業研究」では、4月に各教育研究分野に配属後、教員陣から熱心な指導を受けながら、各自が1年を通じて研究テーマに向き合い、独自の視点から問題を分析し、解決策を見つけるための研究を進めている。2月に卒業論文提出と発表会を実施している。卒業研究は、学生たちが自分自身で主体的に研究を進め、専門的なスキルや知識を磨く貴重な機会である。また、卒業論文提出と発表会を通じて、社会に貢献するための専門性を高めることができる。



I 教育・研究の特色

人間情報工学科は、岡山県立大学開学から13年後の2006年4月に「スポーツシステム工学科」として設置され、その後2015年4月に「人間情報工学科」として名称変更されて、現在に至っている。人間情報工学科では、人間の生活環境を支える情報工学と、人間の能力や特性をモデル化する生体機能学、情報技術をもつづくりに活かした機器設計学の3つの学問領域に関する深い知識及び技術の活用と、豊かな教養と人間性に基づき、グローバルな視点から多種多量な情報が組み込まれた人間との高い親和性をもつ新たなソフトウェア・ハードウェアの設計・開発ができる技術者の育成を目指している。現在では、下記に示す3講座12教育研究分野から構成されている。

人間情報工学科 学科構成 (2022年10月時点)

講座	教育研究分野	
インテリジェントシステム	コンピュータ工学	脳情報システム
	生体システム	画像情報工学
スポーツ・ヒューマンダイナミクス	人間動態学	生体情報計測
	人間行動学	感性情報工学
人間支援工学	人間・熱環境	人間機械システム
	メカトロニクス	計測システム工学

II 活動の記録

1. 学科教育

1～4年生の学科教育では、4年間で情報工学、生体機能学、機器設計学に関する広範囲な分野の専門的知識を系統的に修得し、かつ、常に進展する先端的な技術を自主的・継続的に学習している。例えば、人体機能や人間動作・行動を数値化するための方法を「人間情報工学実験」で、自然な動きを妨げない(制約しない)でヒトの動きを計測する計測システム構築を「創造設計実験」で学んでいる。

2. 学外オリエンテーション

1年生では、人間情報工学科への入学後すぐに、学科の教育・研究、学生生活に関する説明、新入生と教員の親睦、周辺地域の見聞を広めることを目的とした学外オリエンテーションを実施している。ある年度の学外オリエンテーションでは、鬼ノ城登山とそれに伴うグループワークを実施した。





3. 卒業研究

4年生の卒業研究では、4月に各教育研究分野に配属後、指導教員との相談の上で研究テーマを決定し、そのテーマに沿って各自が1年を通じて主体的に取り組んでいる。特に学科として、9月の中間報告会、2月に卒業論文提出と発表会を実施している。



沿革

1993 (平成5) 年	岡山県立大学開学
1997 (平成9) 年	情報系工学研究科(修士課程) 設置(電子情報通信工学専攻、機械情報システム工学専攻)
1999 (平成11) 年	情報系工学研究科(博士後期課程) 設置(システム工学専攻)
2010 (平成22) 年	情報系工学研究科人間情報システム工学専攻(博士前期課程) 設置
2013 (平成25) 年	情報系工学研究科(博士前期課程) 再編(システム工学専攻設置)

教育理念

情報系工学研究科は、情報技術を活用して、人間及び自然との調和を図りながら未来創造社会の持続的発展に、広い視野に立って貢献できる技術者及び研究者を育成している。

教育方針

情報系工学研究科は、学位授与の方針に掲げる人材を育成するため、専攻が定める博士前期課程及び博士後期課程のカリキュラム・ポリシーに従った教育課程を編成し、次世代 ICT 技術の開発・展開に必要な専門知識を融合させる電子情報通信工学領域、情報工学と機械工学を統合した次世代技術の開発・展開に必要な専門知識を融合させる機械情報システム工学領域、人間の生活支援に関する次世代技術の開発・展開に必要な専門知識を融合させる人間情報システム工学領域を設けている。

歴代研究科長

1代	1997(平成9)年度	～	本田 和男
2代	2000(平成12)年度	～	山北 次郎
3代	2005(平成17)年度	～	川畑 洋昭
4代	2007(平成19)年度	～	加藤 隆
5代	2009(平成21)年度	～	渡辺 富夫
6代	2011(平成23)年度	～	横田 一正
7代	2013(平成25)年度	～	金川 明弘
8代	2015(平成27)年度	～	尾崎 公一
9代	2019(令和元)年度	～	榊原 勝己
10代	2021(令和3)年度	～	尾崎 公一

教育・研究のあゆみ

情報系工学研究科は、1997年に修士課程の「電子情報通信工学専攻」と「機械情報システム工学専攻」の2専攻からなる研究科として設置された。1999年には博士後期課程の「システム工学専攻」が設置され、同時に修士課程は博士前期課程に名称変更された。2006年に設置されたスポーツシステム工学科の学年進行にあわせ、2010年に博士前期課程に「人間情報システム工学専攻」が設置された。2013年には、情報工学部3学科に積み上げた3専攻から1専攻に改組し、専攻内に5領域（情報工学領域、電子通信工学領域、ヒューマンロボティクス領域、機械プロセス・エネルギー工学領域、人間情報工学領域）を設けた。2016年には、情報工学部3学科の学士課程教育と博士前期課程の連続性を担保すると同時に1専攻の利点を生かすため、1専攻3領域（電子情報通信工学領域、機械情報システム工学領域、人間情報システム工学領域）とした。

システム工学専攻（博士前期課程）では、デジタル革新による未来創造社会の発展を支えるため、電子情報通信工学、機械情報システム工学、人間情報システム工学等の分野で、地域産業の振興をリードできる高度な専門技術者の育成を目指しており、2022年度末までに1,165名に対して修士（工学）



の学位を授与している。主な就職先は、情報・通信業、電気・電子、製造業である。

システム工学専攻（博士後期課程）では、デジタル革新による未来創造社会の多様な要請に応えるべく、専門分野において、理論や技術を深く修得し、新たな問題を発見し解決することによって、既存の枠組みにとらわれない総合的・先端的知識や技術を切り開くことができる技術者、研究者の育成を目指しており、2022年度末までに70名に対して博士（工学）の学位を授与している。

デザイン学部



沿革

1993 (平成5) 年	岡山県立大学開学 デザイン学部を設置 (ビジュアルデザイン学科、工芸工業デザイン学科)
2006 (平成18) 年	デザイン学部 学科再編 (デザイン工学科、造形デザイン学科設置)
2021 (令和3) 年	デザイン学部 学科再編 (ビジュアルデザイン学科、工芸工業デザイン学科、建築学科設置)

教育理念

デザイン学部は、人間・社会・自然の調和を目指したデザイン・建築を創造できる人材教育を目指している。社会動向を的確に把握することにより課題を自ら発見する能力を備えるとともに、自ら発見した課題をデザインによって表現・解決することができる力を育てることを念頭に置いている。それを実現するために、学部の基礎的な共通教育に加えて、実学教育を中核とした各分野の専門教育を行うことで、豊かで新しい生活と文化の形成に必要なデザイン力とマネジメント能力を有する、地域・国際社会の持続的発展に貢献できる人材を少人数教育によって育成している。

教育方針

デザイン学部では、学位授与の方針に掲げる人材を育成するため、デザイン・建築に関する広範囲な分野の専門的知識・技能を基礎として、新しい時代をデザイン・建築で切り拓く人材の育成を目指している。デザイン・建築を通じて地域や社会の課題解決に活かせる能力を身につけるために、体系的な教育課程を編成し、修得したデザイン・建築分野の専門的知識・技能を基礎とし、主体的に地域や社会に関わる課題を解決に導くための計画・遂行能力、並びにそれらを継続的に自ら積み上げていく力を養うことを教育方針としている。



歴代学部長

1代	1993(平成5)年度	～ 出口 良夫
2代	1999(平成11)年度	～ 清水 國夫
3代	2001(平成13)年度	～ 平田 稔
4代	2003(平成15)年度	～ 栗原 真
5代	2006(平成18)年度	～ 山田 孝延
6代	2009(平成21)年度	～ 大河内信雄
7代	2011(平成23)年度	～ 吉原 直彦
8代	2013(平成25)年度	～ 嘉数 彰彦
9代	2015(平成27)年度	～ 森下 眞行
10代	2019(令和元)年度	～ 嘉数 彰彦
11代	2023(令和5)年度	～ 北山由紀雄

学部長から

デザイン学部は2021年度から3学科体制がスタートし、より機敏に、そして柔軟に、時代や社会の要請に対応できるようになりました。デザインには、己の欲求を満たすことを追求することではなく、他者のために己の力を活かそうとする志こそが求められているのです。各専門分野における技術的スキルの向上に留まらず、デザイン的思考を社会において活かすことを目標としています。研究と教育を通じてその考え方、捉え方をも深め、地域社会のみならず、世界からも求められ、期待されるデザイン学部を、引き続き目指してまいります。

教育・研究のあゆみ

岡山県立大学は、日本で最初のデザイン学部を持つ大学として1993年に設立された。デザイン学部は開学時、ビジュアルデザイン学科と工芸工業デザイン学科の2学科でスタートした。その後、時代の変化に対応した改編を経て、デザイン工学科と造形デザイン学科の2学科となった。さらに2021年には、地域からの強い要望を受け、時代が大きく変化している中で、専門性を高めながらデザインの広義な意味である計画・共有・流通を含めた分野の教育を進められるように、デザイン工学科の建築・都市デザイン領域を学科として独立させ、視覚デザインを専門とするビジュアルデザイン学科、工業デザイン及び工芸領域を専門とする工芸工業デザイン学科、意匠を中心とした建築を専門とする建築学科の3学科での体制に改編し、新た

なデザイン教育を展開している。また、2021年のデザイン学部改編と同時に、本学全体として文部科学省「大学による地方創生人材教育プログラム構築事業」の採択を受け、「吉備の杜」創造戦略プロジェクト-雑草型人材育成をめざして-に取り組み、「吉備の杜クリエイター課程」の中でデザイン学部としての特性を活かした活動を行なっている。さらに、学部とデザイン学研究科を連携する形で、同プロジェクトに包括されるプログラムの一つである「森と建築と匠を温め羅ねる杜」を実施している。国際学術交流においては、グローバル社会に対応できる能力を育成することを念頭に、積極的に推進している。これまでの主な活動は、アアルト大学・ラハティ応用科学大学(フィンランド共和国)へのスタディ

ツアー(2017年)、国立雲林科技大学設計学院(台湾)との交流(2015年、2017年)、ポートランド州立大学(アメリカ合衆国)での研修(2017年)、モンテレイ工科大学デザイン学部(メキシコ)との国際交流推進事業(2017年、2018年)、ウソン大学メディア学科(韓国)との卒展への相互参加(2018～2020年)などである。教育方針に示されている「主体的に地域や社会に関わる課題を解決に導く」ことを念頭に、地域や社会の課題解決に向けた取組として、岡山県内の公的機関や民間団体等との連携事業も、デザイン学部としての専門性を活かし、積極的かつ継続的に取り組んでいる。

学部長
北山由紀雄





I 教育・研究の特色

ビジュアルデザイン学科では、地域・国際社会の持続的発展のために能力を発揮できるグラフィックデザイナー、アートディレクター、映像クリエイター、WEBデザイナー等、広告業界や出版業界で活躍するスペシャリストの育成を目標としている。そのため本学科では、様々なメディアで活用できる視覚伝達の知識・技能を基盤に、グラフィック・映像の両デザイン分野における専門性を追求できるよう積み上げ型の専門教育プログラムを柱としたカリキュラムを編成している。1年次では視覚伝達の基礎を学び、2年次から、グラフィックデザイン、映像デザインいずれかの専門科目を選択し、各分野の専門と感性を高めていく。3年次では地域や社会のニーズに対して専門的な視点から企画提案できる判断力・実践力を身に付け、4年次では卒業研究を通じて総合力を磨くことを目指している。

II 活動の記録

1. 教育カリキュラムにおける活動

2021年の学科改編時に、新しいビジュアルデザイン学科の教育理念・方針を踏まえ、教育内容の見直しを行った。例えば、本学科に入学して最初の演習授業である「ビジュアルデザイン基礎演習」では、グラフィックや映像を中心としたビジュアルデザイン分野の表現手法に対する観察力と分析力を修得することを目的とした。この演習では、身の回りにあるデザイン物や映像を対象とした観察スケッチ（表現手法の追体験・トレース）を繰り返し行い、対象をさまざまな観点から分析することで、ビジュアルデザインに対する理解を体験的に深められる活動が行われている。このほか、プロジェクト系の授業などを通して、デザイン的な視点からの課題発見と解決案の提示・実践により、適切なコミュニケーションに基づく具体的な地域や社会への働きかけができる力を養う教育を行っている。

2. 社会に向けた取組

◆ デザインプロジェクト演習

2018年より、「エブリイ×岡山県立大学」(商業施設エブリイ Okanaka 津高との協働プロジェクト)として、子供向けワークショップやデザイン装飾による店内活性化プロジェクトを実践している。関連業界の現状や将来展望のレクチャーを企業担当者から受けつつ、ビジネスマナーや集客方法の検討、顧客満足度向上の手法、プレスリリースの作成、費用計算等の実務を通して、大学内の授業では得ることができない社会感覚を涵養することを目的とした活動を行っている。





◆ 総社市吉備路文化館との連携活動

2015年より、版表現の普及と館収蔵作品の積極的公開を目的とした展示を実施している。これは「版表現の楽しみ」と題した展示企画の立案から作品の選定、広報・展示・記録に至る一連の活動からなる取組で、学生の持つデザインスキルを用いながら、社会に開かれた展覧会を実現させるという実践的経験を積む活動となっている。

◆ 倉敷市との連携活動

写真文化の向上と地域の賑わい創出を目的に、倉敷商工会議所、倉敷市文化振興財団等とともに、2004年から「倉敷フォトフェスティバル（写真公募企画展）」を実施している。倉敷駅前アーケードを主会場とし、全国から公募した写真作品から、著名な写真評論家に展示作品を選出してもらい、60点余りの大型布プリントとして展示するものである。このプロジェクトは、学生の任意参加によるSAKURA Projectが、実施計画、デザイン、広報等の実務面を担っている。この活動によって、社会貢献やプロジェクト実施に対する意欲を強く持つ学生が育っている。現在この活動は、倉敷という特徴ある地域にとっての欠くことのできないプロジェクトとなっている。



I 教育・研究の特色

工芸工業デザイン学科では、立体的な造形教育を基盤に、工芸的な緻密さと工業的な合理性を学ぶことで、社会の持続的発展に貢献できるスペシャリストの育成を実現するための、専門教育プログラムを柱としたカリキュラムを編成している。1年次は立体デザインの基礎知識や基礎技能を学び、2年次になるとプロダクト、テキスタイル、セラミックいずれかの専門科目を選択し、各分野の専門性を高める。3年次では地域や企業の課題に対する企画提案力を身に付け、4年次では卒業研究を通じて総合力を磨くことを目指している。

学科を構成する3つの専門分野の特色は以下のとおりとなっている。

◆ プロダクトデザイン

工業製品や生活用品などの「もの」のデザインのみならず、情報や顧客体験など「こと」のデザインを含む広義のプロダクトデザインを対象として、デザイン開発における一連の知識や、実務に必要な各種技能を修得する。

カリキュラムの例：「プロダクトデザイン演習II」では、プロダクトデザインにおける人体と道具の関係、量産とフォルムの関係を焦点とした課題に取り組み、発想をフォルムに落とし込むための技能を修得する。

◆ テキスタイルデザイン

繊維素材と染織技法を基礎とした造形表現を展開させ、ファッションデザインや商品企画、芸術表現や空間演出を行うための様々な能力を修得する。

カリキュラムの例：「テキスタイルデザイン演習II」では、シルクスクリーンプリント技法による制作に取り組むことにより基本的な捺染技術を修得し、プリントテキスタイルデザインの企画提案を行う。

◆ セラミックデザイン

食卓を彩る食器や住空間を演出するタイルなど機能的なものから芸術表現までを対象に、陶磁器の成形や焼成に関する技能や、ものづくりの考え方を修得する。

カリキュラムの例：「セラミックデザイン演習IV」では、自身の研究の方向性を明確にした上で、自己表現としてセラミック作品の制作に取り組むことにより専門知識を広め、多角的な視点から素材を捉えることによって、独自の表現手法を修得する。





II 活動の記録

1. 企業との連携活動（プロダクトデザイン）

プロダクトデザインでは、企業との産学連携授業や授業外のワークショップを実施し、授業で学ぶ専門技能がどのように企業活動と結びついているかを体験することで、「専門的知識・技能」「論理的思考力・判断力・実践力」「コミュニケーション力」を育成することを目指している。スズキ株式会社と連携したクレイモデルワークショップでは、車両メーカー特有の職種でありデザイナーのイメージを具体化する「クレイモデラー」に着目し、現役クレイモデラーからの指導によって、専門職に求められる職業意識やより高度な専門技能を修得する。

2. 高梁市成羽美術館との連携活動 （テキスタイルデザイン、セラミックデザイン）

社会に向けた取組として、代表的な地域産業の繊維（テキスタイル）と陶磁（セラミック）を核とした3年次の工芸系デザイン演習科目では、高梁市成羽美術館との“ものづくり”を活用した連携活動を実施している。美術館の収蔵品である「成羽地域産出の植物化石」や「児島虎次郎の絵画やエジプトコレクション」等をモチーフとし、現地で資料調査を実施した上で、それぞれの専門分野の素材や技法の特性を活かしたオリジナルのミュージアムグッズを開発する。デザインを専攻する学生が実社会と関わりながら商品開発に携わる中で、幅広い知識や造形スキルの修得に加え、「実践的かつ論理的な思考力」「主体的に課題を発見し、解決に導く力」「コミュニケーション力と、それを社会に向ける力」を育成し、多様な人々と協働する姿勢を身につけることを目指している。また、この取組の成果は、学外のギャラリーにおいて展覧会形式で広く一般に向けて公開している。

建築学科

学部・学科

Faculty・Department



I 教育・研究の特色

建築学科では、建築設計を中心にインテリアから地域計画に至る計画・設計・デザインを教育と研究の中核としている。設計を中心としながらも、建築分野の広範な知識や技能を修得することで、国際社会・地域社会の持続的発展に寄与する建築家や建築分野の専門家といった多様な人材の育成を目指している。カリキュラムは、体系的に構築された共通教育科目を通じて豊かな人間性を育むとともに、学部共通科目群から基礎的で広範なデザインの知識を学ぶ。建築学科の専門教育としては、初年次から建築表現技法や建築設計基礎を学び始める。高学年になるに従い、建築史・建築計画・都市計画や建築構造・建築環境といった専門知識を講義や演習を通して学ぶ。このようにして得た知識・技能を用いて、地域プロジェクトや卒業研究などに主体的に取り組むことで、実践的な課題解決力を磨くこととしている。

II 活動の記録

1. 学外建築研修

建築は実際にその場に身をおいて、建築全体やディテールを見るときにも、光や空気、視線や人の動きを実感することが重要である。地方大学ではその機会が少なく、これまで散発的に見学会を実施していたが、建築学科では3つの学外建築研修科目を設置した。1年次研修では、京都や東京等の都市空間を体験する。2年次研修では歴史的な建築を学ぶため奈良等に赴く。また海外建築研修も隔年で計画しており、2022年度はローマを訪問した。研修では、単に旅行して建築を見るだけでなく、事前に歴史や建築について十分な下調べをし、現地では専門家からのレクチャーを受け、建築の意図から考えさせるようにしている。

2. 歴史地域の調査と改修デザイン

3年生を対象とした「都市環境調査」では、岡山市の陣屋町足守歴史地区のまちづくりを2016年度から3年間にわたり取り組んだ。1年目は歴史地区の保存状況を調査し、時間の経過による町並みの様相変化を分析した。2年目には、屋敷をギャラリーに改修することを目的として、実測と改修案を作成した。これには、メキシコ・モンテレイ工科大学の学生15人と本学学生あわせて約30人が共同で携わり、価値観や手法の多様性についても学ぶ機会となった。3年目には、空き家となっている町家を地域に開いた空間として活用する計画を考え、学生の手で実際に工事まで行った。このように、地域の歴史や空間をリサーチし、具体的な計画を考えることにより、地域環境の中で重要となる要素は何かを真剣に考え、その活用方法を考案するという実践的な教育・研究を重要視している。





3. デザインプロジェクト

全デザイン学部生を対象とした「デザインプロジェクト演習」では、岡山市の表町商店街を対象に、建築・プロダクト・ビジュアルなど幅広い分野の学生が共同で取り組む演習課題を2019年度から3年間実施した。学生目線でまちづくりをデザインすることをコンセプトに、「学生不動産」という活動団体を立ち上げ、商店街で開催されている木曜日への学生出店やSNSを活用した情報発信、ロゴや横断幕・暖簾のデザインと制作、ストリートファニチャーや屋台のデザインと制作、空きビルの活用提案など幅広い活動を展開してきた。参加学生数は3年間で80名以上であり、活動の継続性も相まって地域に広く認知されるプロジェクトとなっている。

4. グローバル教育

特定の地域や場所から建築を発想しようとする時にも、より広い視野を持って取り組むことが重要であるため、グローバルな視野を獲得する機会を積極的に設けている。これまで、台湾・国立雲林科技大学や、メキシコ・モンテレイ工科大学及びモンテレイ大学と連携し、現地の学生と共同で、町並みや建築空間に関する課題に取り組んできた。例えば台湾では、歴史的町並みが現在どのように維持されているのかを、観察と聞き取りにより把握するとともに、今後、古い建物をどのように活用し続けていくのかを考案する課題に共同で取り組んだ。



沿革

1993 (平成5) 年	岡山県立大学開学
1998 (平成10) 年	デザイン学研究科(修士課程) 設置
2010 (平成22) 年	デザイン学研究科(修士課程) 再編(デザイン工学専攻、造形デザイン学専攻)

教育理念

デザイン学研究科は、グローバルな視野と感性を持ち、社会を的確にとらえ時代の変化を洞察することで、将来予想される問題を優れたデザインの創出により解決し、豊かで新しい生活と文化に寄与できる人材を育成する。

教育方針

デザイン工学専攻では、デザイン工学の理論と技術を修得する教育研究を行い、各デザイン分野での諸問題の解決とデザイン手法の革新を図り、社会に貢献することのできる高度専門職業人としてのデザイナー及び研究者を養成する体系的な教育を行っている。

造形デザイン学専攻では、造形デザイン学の理論と技術を修得する教育研究を行い、新たな造形デザイン構築において諸問題を総合的な視点から解決し、社会に貢献することのできる高度専門職業人としてのデザイナー及び研究者を養成する体系的な教育を行っている。

歴代研究科長

1代	1998(平成10)年度	～ 出口 良夫
2代	2000(平成12)年度	～ 清水 國夫
3代	2001(平成13)年度	～ 大河内信雄
4代	2002(平成14)年度	～ 草間 喆雄
5代	2005(平成17)年度	～ 山田 孝延
6代	2006(平成18)年度	～ 鈴木富士夫
7代	2007(平成19)年度	～ 山田 孝延
8代	2009(平成21)年度	～ 大河内信雄
9代	2011(平成23)年度	～ 吉原 直彦
10代	2013(平成25)年度	～ 嘉数 彰彦
11代	2015(平成27)年度	～ 森下 眞行
12代	2019(令和元)年度	～ 嘉数 彰彦
13代	2023(令和5)年度	～ 北山由紀雄

教育・研究のあゆみ

デザイン学研究科は、1998年創設後、2010年に「プロダクトデザイン学領域」と「建築デザイン学領域」及び「情報デザイン学領域」からなる「デザイン工学専攻」、並びに「ビジュアルデザイン学領域」と「セラミックデザイン学領域」及び「テキスタイルデザイン学領域」からなる「造形デザイン学専攻」に改組された。さらに2013年度からは、デザイン工学専攻では、工業製品、日用品など製品を対象とした「製品・情報デザイン学領域」と、街づくり、都市や地域環境など広範囲な空間領域を対象とした「建築・都市デザイン学領域」に分かれ、製品・情報デザイン学領域は豊かな生活を創造する製品の実践的、総合的な教育研究に取り組み、建築・都市デザイン学領域は人と環境の調和を目指した高度な教育研究に取り組んでいる。また、造形デザイン学専攻では印刷メディアを主体とした造形構成・編集、デジタルメディアを主体としたコンテンツ形成、生活空間を構成演出するアイテム制作、現代を意識した造形表現を基盤として、デザインの可能性や造形への挑戦を目指して、社会に求められるデザインとして専門的かつ総合的な教育研究に取り組んでいる。

2021年より「吉備の杜」創造戦略プロジェクト(COC+R)が始動。大学院においては「吉備の杜プロデューサー課程」を



設け、地方創生人材教育プログラムを充実させた。本課程では、「研究科共通基盤科目」として異分野の学外講師を迎え、リベラルアーツ教育の充実を図っている。また、研究科横断型科目「研究科クロスセクション」と、社会人と協働して課題解決に取り組む「創造戦略プロジェクト」を開講し、様々な現場で即戦力となるスキルが身につくような活動に取り組んでいる。